

2021年5月10日

放送倫理・番組向上機構（BPO）

放送倫理検証委員会 御中

株式会社フジテレビジョン

放送倫理検証委員会決定に関する取り組みについて

弊社は、2021年1月18日付の貴委員会決定“フジテレビ『超逆境クイズバトル！！99人の壁』解答権のないエキストラ補充に関する意見”において、1年以上にわたり、欠員の補充として解答権のないエキストラを出場させ、「1人対99人」というコンセプトを信頼した多くの視聴者との約束を裏切ったとして、『超逆境クイズバトル！！99人の壁』（以下、『99人の壁』といたします）には放送倫理違反があったとの判断を受けました。

弊社はこの決定を真摯に受け止めております。決定を受け、弊社が行った対応と取り組みについて、以下の通りご報告します。

1. 委員会決定の報道について

委員会決定を受けて、当日の弊社ニュース番組「FNN Live News イット！」の全国ニュース枠において、以下の通り、委員会決定と弊社のコメントを放送しました。

（以下、放送内容）

BPO＝放送倫理・番組向上機構の放送倫理検証委員会は、フジテレビのバラエティー番組『超逆境クイズバトル！！99人の壁』に、放送倫理違反があったとする意見を発表しました。『99人の壁』は、1人のチャレンジャーが99人の解答者と対決するクイズ番組ですが、レギュラー番組として放送されたおとし10月までの25回全てで、参加者100人の一部が集まらず、欠員を解答権のないエキストラで補っていました。

BPOは、「番組には、広い視野から警鐘を鳴らすブレーキ役が不在で、意欲的に行ったスタッフの配置も有効に機能しなかった」などと指摘。「1人対99人」というコンセプトを信頼した多くの視聴者との約束を裏切るもの」として放送倫理違反があったと判断しました。

フジテレビは、決定を真摯に受け止め、今後の番組制作に活かしてまいります。（以上）

また、同様の内容を、1月23日放送の自己検証番組『週刊フジテレビ批評』において放送すると共に、弊社系列28局で運営するオンラインニュースサイト「FNNプライムオンライン」でも配信しました。

2. 委員会決定の社内周知について

委員会決定の内容を社内で共有するため、全社横断でコンプライアンス案件の報告や討議を行う次の3つの会議体において、委員会決定の報告を行うとともに、意見交換を行いました。それぞれの会議体での内容は、各セクションに持ち帰って情報共有されています。

- 1月25日、放送コンプライアンス委員会（局長クラスが出席）
- 2月15日、放送コンプライアンス小委員会（部長クラスが出席）
- 1月19日、放送コンプライアンス連絡会（担当部長クラスが出席）

さらに、その後3月5日に開催された放送コンプライアンスワーキンググループ（局長、室長クラスが参加する全社横断の会議体、3か月に1度開催）では、委員会決定について各部署で話し合った結果や対策などを持ち寄り意見交換しました。

3. 制作センターの取り組み

- 1) 委員会決定が出された1月18日、意見書を第二制作室*の社員全員に配布し、精読の上、理解を深めるように指示しました。

（*2021年3月、弊社内で組織の見直しがあり、第二制作室は「第二制作部」となりましたが、本報告書では便宜的に、「第二制作室」、「室会」など、旧来の名称で表記を統一しています。）

- 2) 翌19日、第二制作室の社員全員が出席する室会において、意見書で、『1年以上にわたり、欠員の補充として解答権のないエキストラを出場させており、「1人对99人」のガチンコのクイズバトルにはなっていなかった』として、放送倫理違反があったと判断されたことや、かつて弊社バラエティー番組『ほこ×たて』において指摘された問題点（委員会決定第20号）との類似がうかがわれるとして、審議入りしたことなどについて説明しました。また、翌週の室会で意見書について意見交換することを前提に、番組ごとにスタッフ全員で意見書の内容を共有して、一人ひとりが今回の問題について考えるよう促しました。

3) これを受け、『99人の壁』は番組スタッフ全員が参加して、意見書について話し合いを行いました。以下は、その中で出た意見です。

なお、意見交換した中には、エキストラ補充問題が発覚した後、番組に加わった新しいスタッフも入っています。

- ・レギュラー開始当初、暴風雨の中でやっているような印象だった。
- ・クイズを100ジャンル作る、事実関係の裏取りもする、関連許諾も取る、は無理があった。
- ・エキストラに解答権を与えなかったことが問題であり、解答権をなくすという安易な選択肢に走るべきではなかった。
- ・最初にエキストラを入れるとき、「大丈夫?」と思った人はいたはず。ただ、そのジャッジを誰がするのか、フワッとしていたのではないかと思う。
- ・解答権が無かったエキストラの方の心を考えると、心苦しい気持ち。そこは今回、考えさせられた。
- ・困ったことはないか?と聞いても上がってこないのも、P陣で気づくようにすべき。
- ・勇気を出して声を出しても、それを拾えたのか疑問。くみ取るための方法を考えなければならない。

一方で、現在の制作体制においては、

- ・今は、番組内で相談できる窓口がある。
- ・すごく話しやすい。わからないことも質問して教えてもらえる。

と、スタッフの間で、制作環境が改善していることへの実感が広がっていることもうかがえました。

4) 1月26日、第二制作室の全社員が参加した室会を開催しました。まず、上記で述べた『99人の壁』の番組スタッフによる意見交換の内容が報告され、その上で、どこに問題点があったのか、再発防止についてどのように取り組むべきか、以下の通り、活発に意見交換が行われました。

- ・若いディレクターにお前の好きにやっていいぞと任せて、どこか無責任になっていた。責任者はちゃんと様子を見守ったり、現場をしっかり見極めなければならない。
- ・目の前の作業に忙殺されている人間は、トラブルをトラブルと認識できないもの。しかるべき立場の人が、「最近ちょっと大変なことない?」というような会話から、困っている部分を吸い出して注意喚起するカウンセリングシステムが必要。
- ・プロデューサーが何人いるから大丈夫ではなく、番組に主体性をもって関わっている人間が何人いるかが問題。

- ・会議の人数が多くて意見を言いにくかったというが、言えるきっかけはあったはず。どのようにしたら意見や情報を吸い上げられるか、考えていくことが必要。
- ・難しいミッションをやり遂げようという人が昔に比べて減った印象がある中で、『99人の壁』は貴重な挑戦。だからこそ今回の問題は絶対に繰り返してはいけない。
- ・番組全体が一つの方向に突き進んでいる時、「できない」、「やめよう」と言うことは本当に難しい。
- ・新番組を立ち上げる判断は難しい。今後、レギュラー化のスパンがどんどん短くなっていくので、一層の注意が必要。

この室会での議論は、第二制作室の社員全員が参加して一人ひとりが問題点を掘り下げ、同じ問題を繰り返さないためにどうしたらよいかを考える、貴重な機会となりました。

4. BPO委員を招き研修会を実施

- 1) 4月22日、放送倫理検証委員会の岸本葉子委員長代行、大石裕委員にご参加いただき研修会を開催しました。弊社からは編成制作担当の取締役、編成制作局長をはじめ、制作、編成、情報制作など社内各部署から、合計約200名が参加しました。
『99人の壁』に対する委員会決定が出された際、コロナ感染防止の観点から、委員会から弊社への個別説明や記者会見がありませんでしたので、この研修会は特に貴重な機会となりました。また、研修会はコロナ感染状況に鑑みて、全てオンライン形式で行われました。
- 2) まず、両委員から、今回の委員会決定の内容に関する解説と、『ほこ×たて』問題の教訓が生かされず、なぜ再び問題が起きたと考えたかについて説明がありました。

この中で、岸本委員長代行からは、

- ・『99人の壁』は他に類のない企画だったが、レギュラー化してから、審議対象となった第25回放送まで、一度も企画どおりにはできていなかった。
- ・類のないものを作ることは、放送の活力の元であるが、そのためにはリスクの十分な検討と、バックアップ体制が必要である。
- ・広い視野から警鐘を鳴らせる番組のかじ取り役がいなかった。
- ・視聴者との約束とは、タイトルやナレーションなどによって作り手自身が決めているものであるから、番組制作の重圧の中でも、必ず守らねばならない。

・『ほこ×たて』の経験を生かすことができず問題が起きてしまったのは、それが自分事になっていなかったからではないか。

など、指摘がありました。

また、大石委員からはこれに補足する個人的意見であると前置きした上で、

・参加者の欠員問題について、クイズ番組として本流ではない所ですつまり、BPOに取り上げられてしまったと違和感を覚えている人もいないのではないかと感じている。

・『ほこ×たて』の教訓が生かされなかったのは、視聴者との約束に対する認識の共有が不十分で、欠員補充問題が大きな問題になるという想像力が不足していたからではないか。

・その対策として、新人教育やリカレント教育を定期的実施したり、番組審議会を利用した課題解決の方法について検討してはどうか。

など、多岐にわたる指摘がありました。

3) 次に弊社からの報告として、委員会決定を受けて、第二制作室の社員全員で意見書を読み込み、意見交換を通じて、自分事として掘り下げて理解するよう努めていること。

また、再発防止策として、

・番組制作体制の再点検と再構築

・誰でも問い合わせができる「第二制作なんでもホットライン」の設置

・視聴者との約束に関する勉強会の実施

について報告しました。

(再発防止策については、後述の「6. 再発防止への取り組み」で詳述します。)

4) この後、参加者と委員の間で意見交換を行いました。主な内容は以下の通りです。

【参加者】

・『99人の壁』は高い理想を掲げ、自分の首を絞めた。考えるポイントが多すぎて、制作現場は手が回らなくなった。時間的余裕がなくなり、一人ひとりが一旦立ち止まる意識をもつことができなかった。

・『ほこ×たて』問題は研修を受けて知っていたが、どこか他人事として聞いていた。自分事としてとらえることが大事だと身に染みた。

・コミュニケーションの欠如をどう解消していくのか、気にしながら取り組んでいくことが必要。

・現場が率先してやらせに走ることはまれ。周囲からの重圧で起きてしまうと思う。最前線のスタッフを追い込んでいくのではなく、それを防ぐ組織のシステムづくりが大事である。現場に寄り添う姿勢が上にとって重要。

【参加者】

Q 欠員をエキストラで補充する際、エキストラに解答権を与えていたらどうだったか？

【委員】

A 個人的意見として。エキストラに解答権がある場合の考え方は、番組が謳っていることと違うかどうかで判断すべき。理想通りにいかないとき、視聴者との約束に反しない形で状況を脱する案はある。意見書にも書いたが、ベテランにはアイデアがあった。その柔軟なアイデアが情報の非共有で生かされなかったのが残念。

【参加者】

Q 欠員補充が1年だったから問題だったのか？1回だけだったらどうだったか？

【委員】

A 欠員補充が25回あったことは重く見た。

【参加者】

Q 今回の件があってから、現場から質問を受けることが多くなった。撮影が見立て通りにいかなかった場合、若手にどういうアドバイスを返せばいいのか？

【委員】

A 若手には引き出しがあまりないので、台本通りに現場で撮れないと慌ててしまうが、視聴者は予定された通りでは喜ばない。現場で起きたリアルを面白いがること。番組によっては、それが視聴者との約束になる。現場で見つけたそうした面白さを提供することは、視聴者にとっても制作者にとっても面白いのでは。

A 演出とやらせについて。ニュースやドキュメントでも編集がある。笑いが含まれる番組においてどこまで許されるかは、視聴者にどのように観られているかを含めて考える必要がある。できるだけびやかに面白さを追求する中で、複雑な連立方程式から解を見つけてほしい。

5) 以上の通り、研修会はおよそ2時間にわたって活発な意見交換が行われ、大変有意義なものとなりました。結びに、制作局長が、以下の通り、研修会を総括しました。

- ・『ほこ×たて』の教訓、研修の仕方の問題、視聴者の感覚とのずれ、などについて両委員から重い言葉を頂いた。
- ・今回の事態を受けて、番組はコロナ感染状況のなか、リモート収録を取り入れるなどチャレンジしているが、慣れが出てこないように気を引き締めなければいけない。
- ・これからは視聴者からどう見られているか、絶えずアンテナを立てて取り組んでいく。

5. 番組審議会への報告

2月10日に開かれた番組審議会で、制作局長が、委員会決定の内容について報告しました。番組審議会への報告は、問題が発覚した後の2020年5月13日以来、2度目です。

報告では、委員会決定は社内全体に周知共有されていることを説明するとともに、『99人の壁』の番組制作スタッフ、および第二制作室制作スタッフ全員で、委員会決定について意見交換したことを報告しました。

また、再発防止策として進めていた「番組制作体制の再点検と再構築」、「視聴者との約束の勉強会」、および「制作上の問題を感じた際にスタッフ誰でも相談できるホットラインの開設」、以上3つの対策について、その進捗状況を説明するとともに、今回の委員会決定を真摯に受け止めて、番組作りに努めていく考えであることを報告しました。

6. 再発防止の取り組み

再発防止策について、以下の通り、取り組みを進めています。

1) 番組制作体制の再点検と再構築

『99人の壁』では、問題発覚直後と今年の2回にわたって、リスクチェックと情報共有の円滑化を図るため、次の通り、組織変更しました。

- ・コンプライアンス担当Pの新設。
- ・CPからADまで全員参加の会議で情報共有をするシステム。
- ・番組を2班体制にして、それぞれにPを配置、身近に相談相手がいる体制に。

同時に、第二制作で新番組をスタートする際、幹部がレギュラー番組として継続できるかを検証するなど、制作体制について確認する試みを始めました。今年4月にスタートした番組を対象に実施済みです。

2) スタッフ誰でも相談できるホットラインの開設

「第二制作なんでもホットライン」を開設し、社員、スタッフ問わず、誰でも番組の制作上で気づいた事があれば、問い合わせができるようにしました。番組内で言いづらいことがないように体制を整備すると共に、それでもなお、問い合わせにくいケースがあれば、そうした声をすくい上げることができるように設置したものです。

3) 視聴者との約束の勉強会

約100人いる第二制作の社員全員を10人程度ずつのグループに分け、すでに9回に

わたって実施しました。今回の勉強会では、『99人の壁』の意見書、『ほこ×たて』の意見書、および「若きテレビ制作者への手紙」をあらかじめ読み込んだ上での参加としました。世代の違う社員を少人数に分けて勉強会を実施した結果、世代を超えた経験や意識の共有が進み、予想以上に有意義な内容となりました。今回の意見書で、『ほこ×たて』の経験が生かされなかったと重い指摘があったことを踏まえ、継続的に毎年やっていかなければならないと考えています。

7. 総括

今年1月に放送倫理違反ありの通知を受け、視聴者との約束の勉強会を繰り返し行う中で制作者はあらためて事の重大性を認識しました。BPO委員を招いた研修会では、放送倫理違反の理由として「看板に偽りあり」「『ほこ×たて』の教訓が生かされていない。」という事が参加者全員で共有されました。

私たちが今回の問題で考えなければならないのは、こうした「事件」を二度と起こさないことです。

「実現不可能に思える企画への挑戦を、本意見書は決して否定しない。むしろその意欲こそ、新しいものを生み出す原動力と考える。必要なのはリスクの十分な検討と、挑戦をバックアップする体制作りだ」と意見書は指摘しています。

今回の事を教訓として、再発防止のため次代の制作者に永続的に伝え続けると共に、この放送界が今後も「新しいものを生み出す」人材が夢を抱いて参入してくる場所であり続けられるような番組作りに取り組んでいく所存です。

以上